



金か？ それとも銀か？

金か、銀か、これは、私の学生時代の学園祭における出展物にまつわる話である。11月といえば学園祭シーズンであるが、この月にちなんだ内容でエッセイを書こうとしている私には、学部生時代に学科で参加した大学祭の「みこし祭」しか浮かばない。よって、大昔の話であるが、お付き合いいただきたい。

みこし祭とは、私の出身大学である岐阜大学の大学祭におけるメイン行事であり、各団体（クラス、学科、部活・サークル等）が自由にエントリーし、それぞれ自作のみこしを担いで岐阜市内をパレードした後、長良川の河原でキャンプファイヤーをするというものである。ただし、現在はどうなっているかは知らない。成り行きは省略するが、私は工学部化学科（通称：化学屋）における代表者（統制）であった。当時、3年生が中心となって運営するというルールがあり、私の代では院生の協力も得て、初めて入賞も果たした。しかし、ここは20th anniversary ということで、統制顧問として活躍(?)した4年次の内容にしたい。

時は1988年、この年の化学屋のテーマは一人の無責任な思い込みによって決まった。なんと、両手がハサミでセミをモチーフにした特撮シリーズ史上最も有名な「宇宙忍者」を作るというのだ（ただし、上半身のみ）。発案者は留年生であった寮の先輩（N氏）で、この案を氏の友人であり、私の寮・研究室の先輩（M2）が賛同した。理由の多くは語らないが、大筋としては「N氏がこれを退治すれば進級できると冗談で思ったから」ということで間違いない。そして、この案が院生会議（3名のM2と私による密談）の了承を得て決定された。正直この決定は冗談かと思った。バルタンは認知度があるものの、化学との関係はない、コンセプト（上述の理由）も周りには理解されるはずもない。とはいえ、お世話になった先輩のためにと、この冗談に付き合うことにした。その年の統制（後輩）に「神のお告げだ!」と説明すると、彼は笑いながら快諾してくれた。なお、ここで言う「神」とはN氏のことで、当時の氏の口癖は「わしは神じゃ!」であった。数年前にN氏からメールが届いたが、冒頭には「神である。」と書かれていた。期待を裏切らない方である。

化学屋は代々、みこしにバッテリーを積んで、電飾やギミックを施すことをステータスとしていた。バルタンもその例外ではなく、二つのバッテリーを積み、目は回転しながら、そして頭はリレー式でそれぞれ光らせた。さらにハサミから煙も出そうと考えた。煙は化学屋の永年のテーマであり、今回こそはと周囲も大いに期待して

いた。ドライアイスなど、火を使わない方法を色々検討したが、安全の確保が困難であったため、最終的には見送った。なお、安全第一をモットーとする方針は今も変わらず、学生指導で貫いている。

制作は平日・土曜は早くても夕食後から、日曜は午後からと学業・研究等に支障のないように行った。よって時間は少なかったが、それでも制作中は色々なことがあった（例えば、本来ならば貧弱な体つきの侵略者の体が筋骨隆々になる、など）。そして、私にとって忘れられない事件が起こった。それはバルタンの色に関することであった。化学屋は伝統的に何故か本体の色を金色としていた。だが、そこはバルタン、金では違和感がある。よって、伝統を守るか、オリジナルに準じて銀にするか、意見は分かれていた（私は後者）。そして、パレードまでわずかという日の夜のこと、現場に行くとピカピカに光ったゴールデンなバルタンが佇んでいるではないか！正直目眩がした。私の留守を狙ったのだろうか（謀られた!）。祭が始まる前なのに、「後の祭り」である。この結果、体つきが良く、金色（ただし、縁取りに銀色を併用）のバルタンが出来上がった。出来栄は非常に良かったが、目立ちすぎるため宇宙忍者ではなく、よく見るとオリジナルよりも飛行には向かない体形をしている。柳田理科雄氏（空想科学研究所・主任研究員、作家）にお見せしたら、素晴らしい突っ込みを頂けること間違いなしであった。完全コピーより数段面白いとは思いますが、金と銀が逆の配色であって欲しかった。

このように、みこし制作はトラブル続きだったが、仲間とワイワイやりながら、時に好き勝手に、そして協調（妥協?）しながら進めていくところに魅力があった。そういう点は、次元は違うが共同研究と似ている。順調に進むとは限らず、時には熱いディスカッションを交えたり、第三者の意見を取り入れたりしながら展開していくものである。その観点からすると、「金か、銀か」を議論する機会がなかったのは残念である。当時、学科を学業以外でも活性化したいという思いから、この行事に力を注いだ。もちろん私一人の力でできたわけではない。関係してくれた方々（諸先輩方、同期・後輩達、先生方）に感謝したい。なお、宇宙忍者をキャンプファイヤーで焼いた御利益のためか、N氏は翌年無事進級し、私の研究室における後輩になられた。

今回は10年来の知り合いである秋田大学の藤原一彦先生にお願いした。

〔大阪教育大学 久保埜公二〕